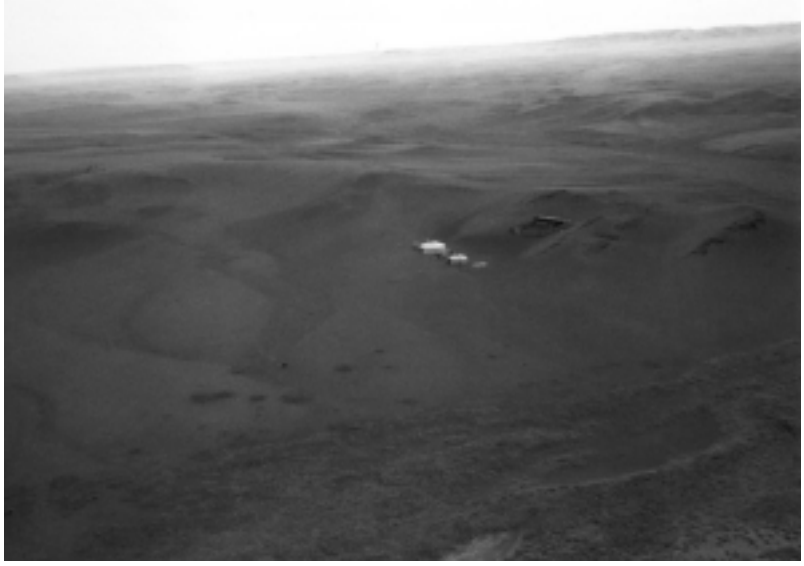
民主党モンゴル環境調査団報告書



2002年8月

モンゴル国内の調査日程（結果）

日付	時間	場所	内容
8/18	16:55	ウランバートル国際空港	OM302 便にて到着
	19:00	ウランバートル市内	日本環境財団理事長主催夕食会
8/19	10:00	自然環境省	自然環境大臣と会談
	11:20	国会議事堂	地方開発・環境委員会委員長と会談
	12:00		国会議長と会談
	13:00	ブロイハウス	JICA 専門家よりモンゴルの自然環境の現状につきレクチャー（昼食）
	15:30	気象庁	気象庁長官と会談
	16:30	在モンゴル日本大使館	当田大使と会談
	19:00	迎賓館	自然環境大臣主催夕食会
8/20	12:00	ウランバートル国際空港	ヘリにてウラン湖に向け出発
		移動	上空より現状視察
	13:40	マンダルゴビ	給油と昼食
		移動	上空より現状視察
	16:00	ウラン湖跡	消滅した湖跡視察
		移動	上空より現状視察
	17:30	サイハンオボー（ツーリストキャンプ）	到着・オンギ川視察
	18:00		ラマ教聖地跡地視察
	21:00		オンギ川住民運動の会と会談（夕食）
8/21	8:00		オンギ川住民運動の会と会談（朝食）
	9:00		モンゴル民主党影の外務大臣と会談
	9:30		ヘリにて出発
		移動	上空より現状視察
	10:30	アルベイール	給油
		移動	上空より現状視察
	13:00	ウランバートル国際空港	到着
		移動	上空より現状視察
	13:30	ガンガ食堂	JICA 専門家と会談（昼食）
	18:00	ウランバートル国際空港	OM902 便にて北京へ出発）

※　ヘリの全行程は約 1200㎞

※　ヘリでの視察にはモンゴル国自然環境省職員・JICA 専門家・日本環境財団理事長が同行

調査団の目的

モンゴル国における気温上昇、干ばつ、砂漠化、山火事の発生などの気候変動（地球温暖化）に関する調査と意見交換

調査団の構成

団　長	小宮山	洋子	NC 環境大臣
団　員	枝野	幸男	政策調査会長代理
	福山	哲郎	NC 環境副大臣
事務局	栂坂	英樹	政策調査会副部長

調査内容

８月 18 日（日）19:00～　高見裕一日本環境財団理事長主催夕食会

モンゴル国は温暖化の影響で山火事が発生し、大きなものだけで 30 か所、全体では 500 か所を超えている。日中の地表温度は 60℃を超え、山火事の煙で星も見えない状況が続いている。モンゴル国の家畜総数は 2500 万頭程度であるが、ここ数年の冬の寒波により 1000 万頭程度が死んだ。このまま寒波が続けば数年後には国が成り立たなくなってしまう。モンゴル国の環境省予算は年間 1200 万円程度で、対策の施しようもない状態であり、日本の支援が必要である。等、モンゴル国の気候変動の現状について説明があった。

８月 19 日（月）10:00～　バルツボルド自然環境大臣と会談

ホテルを出発し、環境省に向かう間も、ウランバートル市周辺の山火事のため、市内は見通しが悪く、たき火の煙のようなにおいが充満していた。今日も山火事が多数発生しているとのことであった。

【写真１】
バルスボルド自然環境大臣との会談

自然環境大臣より、現状等について説明がなされた。

○　例年にない暑さ（この日は最高気温が 36℃。例年であれば９月上旬に初雪）

○　ウランバートル市内では８月に全く雨が降っていない（例年 80mm 程度の降雨で、

１年を通じて一番降雨量が多い）

○　水不足がひどく、今年だけで枯渇した河川が 400～600 本あり、大河川も水量不足

○　国土全体の 70%が干ばつ

○　山火事が多発（落雷による自然発火など）

○　異常気象が原因と考えられるシベリア蛾の大量発生（昨年はイナゴが大量発生）

○　次の冬の寒波（＝ゾド）による被害が心配される（2001 年の家畜被害は 475 万頭だが、それ以上の被害と予想）

温暖化はモンゴルにおいて深刻な影響を与えつつあるとのことであり、モンゴル国内の温暖化に関する科学的な調査が必要で、そのための「環境研究研修センター」設置について日本に協力を求めたいとのことであった。また、干ばつ対策として、生物全体で利用するための「環境井戸」掘削についても協力をしてほしいとのことであった。さらに、淡水魚の持続可能な利用についても日本の水産庁の協力を必要としているとのことであった。

これらの要請については、民主党としても政府に働きかけ、その実現を図る努力をすることを調査団から伝えた。

８月 19 日（月）11:20～　グンガードルジ地方開発・環境委員長と会談

【写真２】
グンガードルジ地方開発・環境委員長との会談

地方開発・環境委員長より、現状についての説明がなされた。

モンゴル国民は日本の支援を感謝している。また、日本の衆参議長のモンゴル訪問要請をしており、早期訪問を期待している。

モンゴルの遊牧は自然環境に依存しているが、干ばつやゾドの周期がおかしくなっている。本来であれば、12 年に１度であるはずなのに、最近は毎年起きている。ここ２年で 700 万頭の家畜が死に、乾燥化・気候の変化が激しく、湖・河川が消滅している。これまでは小麦や野菜は国内自給しており輸出もしていたが、現在では輸入せざるを得なくなっている。

今年も猛暑で植物が枯れ、家畜のえさもない。小麦の収穫も半減するだろう。次の冬

の見通しも厳しい。本日の 15 時に国会の全委員長が議長に呼ばれており、そこで冬の対策を協議することになっている。

砂漠化・地球温暖化などの環境問題は世界共通の問題となりつつあり、世界全体の人類の運命がかかっている。各国がエゴイストの立場をとってはいけない。

山火事対策などで、緊急に基金を使う必要があるときに、日本政府の許可が必要なケースがあり、それに時間がかかり対策が遅れることがある。これについての改善をお願いしたい。との話があった。

これに対し、調査団からは、基金を使う際の許可については改善を政府に求めたいと伝えた。また、国会議員同士の情報交換が重要になるとの認識から、両国の国会（あるいは環境委員会）同士で連携し、信頼関係の向上を図るようにしてはどうかとの提案を行い、地方開発・環境委員長もその重要性について認識が一致した。また、アジア地域の政治課題についての意見交換がなされた。

８月 19 日（月）12:00～　トムルオチルモンゴル国会議長との会談

グンガードルジ地方開発・環境委員長の取り計らいにより、国会議長との会談が急遽実現することとなった。トムルオチル国会議長も日本の衆参国会議長のモンゴル訪問を強く希望していた。また、温暖化の影響が大きく将来が懸念されるが、持続可能な遊牧をめざしたいとのことであった。

調査団からは、国会や委員会などを通じた交流を進めたいとの提案がなされた。

【写真３】
トムルオチル議長・グンガードルジ委員長と会談を終えて

８月 19 日（月）13:00～　JICA 坪内氏との会談（昼食）

モンゴルの自然環境の現状について次のような説明があった。

- ○　永久凍土が溶け始めている
- ○　永久凍土が溶け始めた結果、メタンガスが大気中に放出されている
- ○　山火事が多く発生しており、危機的な状況
- ○　モンゴルでは定期的に山火事が発生し、その場所の永久凍土が解けることにより森が形成され、それが命を育んできたが、そのバランスが崩れている

○　今年の気温・降雨とも、100 年に一度の範囲を超えたもの（別紙参照）
○　ゴビ地域の湖沼はほとんど消滅した
○　ウラン湖は消滅し、オンギ川は 100km 以上にわたって枯れている
○　湖や森の減少→温度変化（気候変動）→湖や森の減少という悪循環
○　モンゴルには、原因を究明するための基礎データが少なすぎる
○　データを使った科学的な解析をする必要があり、日本として協力できる部分
○　オオカミの管理と毛皮のフェア・トレードが必要

【写真４】
JICA 坪内氏からヒアリング（昼食中）

８月 19 日（月）15:30～　気象庁長官との会談

自然環境大臣の取り計らいにより、気象庁長官との会談が急遽実現することとなった。調査団からは、気温・降水量・河川流量などのデータや８月 27 日に発表される予定のゾド災害予想図などについての資料を要望した。この点について、気象庁長官からは、データについては取り急ぎ用意したいとの回答を得た。

【写真５】
気象庁長官との会談

また、気象庁長官からは、次のような現状についての説明があった。
○　昨年が国土の 65％で干ばつ、今年も国土の 70％で干ばつが発生しており、明らかに気候に変化がみられる

○　８月 10 日以降暑さがぶり返し、30℃以上が 10 日以上続いている
○　各地で激しい気温変化がみられ、水資源が減少している
○　河川調査では、今年の流量の減少は、過去 60 年間例がなかったもの
○　96 年以降は絶えず河川流量の減少が記録されている
○　温暖化により 2020 年には、夏の気温が 1.4～3℃上昇、冬の気温が 1.4～3.6℃上昇すると予想されている
○　冬の気温は全体的にみれば上昇傾向だが、１年だけみると急激に気温が下がる年(=（＝ゾド）もみられる
○　2020 年までに降水量も若干の増加を予想しているが、気温上昇による蒸発量の上昇により乾燥化が進む
○　永久凍土の調査は旧ソ連支配下でなされたが、今は十分ではない
○　ゾドを国連の自然災害リストに入れたいので日本も協力してほしい

調査団からは、早急にデータを揃えてほしいこと（日本環境財団経由で入手できることになっている)、ゾドを国連の自然災害リストに加えることについては協力を惜しまないことを伝えた。

８月 19 日（月）16:30～　当田在モンゴル日本大使との会談

調査団より、温暖化の影響を詳細に確認するためにも、環境研究研修センターの設立が必要であること、淡水資源の利用と保全について日本が協力をすべきこと、ゾドに対して何らかの支援が必要であること、大使館としても情報を日本に向けて発信をしてほしいこと、日本語検定試験（15 ドル）の受験料を下げるべきこと、遊牧民に対して直接家畜を貸し付けるなどの支援が必要であり、日本としてできる限りの支援をすべきであることなどを大使に伝えた。

８月 19 日（月）19:00～　バルスボルド自然環境大臣招待の夕食会

【写真６】
夕食会前の懇談

自然環境大臣より、山火事の件で本日臨時閣議があり、各閣僚が心配しているとのことであった。日本とモンゴルの交流の推進やモンゴルの人民革命党とわが党との交流などに

ついても話が及んだ。最後に、調査団から、ぜひとも再来日をしてほしいとの要請を行った。自然環境大臣は、地球サミット後、できるだけ早い時期に再度来日すると約束した。

８月 20 日（火）12:00～19:00　ヘリコプターにて視察（ウラン湖、オンギ川）

本来であれば、一番雨の多い時期であり、緑の草原となっているはずの地域でも、赤茶けた大地が広がっている。植物はほとんど生えておらず、冬のエサ不足が懸念される。

94 年まで水があったウラル湖（東西 40km×南北 45km、平均水深 1.6m）（参考：琵琶湖の面積は 671 平方キロ）に全く水がない状態となっている。砂嵐がひどく、上空から湖全体が確認できない。８月に砂嵐が起こることはほとんどあり得ず、これも気候変動の影響であると思われる。温度上昇により永久凍土が解け、地下水の流れが変化することによって河川の水量が減少し、ウラル湖が消滅したという推測も成り立つのではないか。ウラル湖の消滅により、周辺の草地も消滅し、地温の上昇により乾燥が進み、ますます砂漠化が進むという悪循環になっている。

【写真７】
ウラル湖の中心
見渡す限り、水は全くない

ウラル湖の中心部分に着陸したものの、周囲に水は一滴もない。砂嵐がひどいため、ヘリの周辺部分だけで調査を終了し、サイハンオボーに向けて出発した。ウラル湖に流れ込んでいるはずのオンギ川も、サイハンオボーまでは流れは全くない。所々、水深が深くなっていたところに水がたまっている程度である。

【写真８】
オンギ川
所々に水はあるが、流れてはない

サイハンオボーのオンギ川河原にヘリコプターを着陸させた。川には全く水がないが、多少土はぬかるんでいた。水がないため、現在では周辺の住民がほとんどいなくなってしまったとのことであった。ツーリストキャンプには井戸があるため、かろうじて運営がなされていた。

サイハンオボーは、かつてラマ教の聖地として 1500 人の僧侶が住んでいたと言われている。旧ソ連支配の下で寺院や施設は徹底的に破壊され、古代の遺跡のような状態になっている。そんな中で子供たちは調査団のために、ラマ教のお経をあげてくれた。

【写真９】
サイハンオボー
干ばつでオンギ川が枯渇

ツーリストキャンプでは、オンギ川復興のための運動をしているＮＧＯの代表と会談した。川を取り戻し、住民の生活を安定させることを目的としている。オンギ川下流部が枯れている原因は、自由化による上流部の森林伐採、金鉱山、温暖化の影響などが考えられるとのことであった。全長 435km のオンギ川の水を復活させるために、植林を行い、金鉱山とも交渉するなどの活動を行っている。キャンプ地の近くでも、ロシアンオリーブ（シーベリー）の植樹と栽培が行われており、果実をジュースやジャムにするなどして換金作物とする予定になっている。このような活動に対して、民主党としても何らかの支援を行うことが可能なのではないかと思われる。

８月 21 日（水）8:00～　住民運動のリーダーと会談（朝食）

住民運動には、３県９郡の 10 万人が参加している。ロシアンオリーブの植樹のために日本の草の根無償を申請中とのことであった。若者中心の運動で、このような地域の運動とも連携し、住民の暮らしを安定させなければならないと強く感じた。

【写真 10】
住民運動のリーダーと

8月21日（水）9:00～　モンゴル民主党スバタール影の外務大臣との会談

モンゴル民主党の影の外務大臣が、民主党調査団がサイハンオボーに来ているとの話を聞きつけ、ウランバートルから急遽駆けつけてくれた。モンゴル民主党は最大野党であり、96年から2000年までは政権にあった（当時は民主連合）。また、サイハンオボーの属する郡の議会では20議席中15議席を占めるなど、地方レベルではかなりの勢力がある。今回は時間がなかったため、十分な意見交換を行うことはできなかったが、モンゴル民主党とも十分に意見交換を行う機会を持つべきであると思われる。

【写真11】
モンゴル民主党と会談

8月21日（水）9:30～13:00　ウランバートルに向けヘリで移動

サイハンオボーからアルベイールを経由してウランバートルへとヘリコプターで戻った。アルベイールでは、草原がみられたが、例年に比べればやはり草の量は少ない模様であった。その他の地域ではほとんど川は枯れ、草が生えている区域も少なかった。わずかに水や草があるところに家畜や人が集まっている。

ウランバートルに戻ったときには、周辺の山火事は消火されており、青空が広がっていた。

【写真12】
ウランバートル近郊
川が流れているところは緑が豊か

調査を終えて

モンゴル国における今年の気象状態は、気温・降雨とも 100 年に１度の範囲を超えている。その原因については、家畜の急激な増加、森林伐採、気候変動（地球温暖化）など様々考えられるが、これほど大規模かつ広範囲にその影響が見られることから、大部分は気候変動（地球温暖化）による影響であると考えざるを得ない。海洋という気候変動に対する緩衝が存在しないモンゴルでは、その影響が直接かつ顕著に現れることが、今回の視察で非常によく理解できた。

気候変動（地球温暖化）の影響をについて、詳細に分析するためにも、モンゴル国内の観測体制やデータ分析、情報発信などの強化は急務であり、「環境研究研修センター」の設置を支援すべきである。また、地元の NGO などが行っている植林活動や井戸掘削への草の根無償の充実、日本の NGO との連携強化などについても、積極的な対応が急がれる。アジアの一員として、また、温室効果ガスを大量に排出している日本の責任として、十分な支援を行うべきである。

今年の寒波（ゾド）はモンゴル国の家畜の２割近く（2500 万頭中の 475 万頭）が死んだ 2001 年を上回るものと予測されており、ゾド被害への支援体制も早急に整える必要がある。特に家畜を失う遊牧民に対する家畜の贈与や貸し付けなどの措置を、日本が積極的に行うべきである。

モンゴル国における気候変動の状況を日本国民に知ってもらうためにも、モンゴル国への支援のあり方を詳細に検討するためにも、バルツボルド自然環境大臣の再来日を実現させるべきである。民主党として、バルツボルド大臣を日本に招くことを検討すべきである。また、国会・委員会・国会議員間の交流についても積極的に働きかけるべきである。

以　上